

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520159

研究課題名（和文） 時事小説の系譜についての総合的な調査研究

研究課題名（英文） Bibliographical Study of Documentary Novel in Early Meiji Period

研究代表者

山田 俊治（YAMADA SHUNJI）

横浜市立大学・国際総合科学研究科・教授

研究者番号 10244485

研究成果の概要：実録と小説、報道と出版が分化する以前の様態を、時事小説という概念で捉え直すことで、報道と出版との蜜月の中で小説が復活し、その小説が報道から分化、自立していく過程を概括できた。日本の近代文学研究では、ともすれば分化以後の見方で、この時期の小説を実物として見下してきたが、まさに報道が芸能や出版とも混交していた時代を解明するためには、そうした見方を括弧に括って、虚心にその時代の様態に即すことの必要性を実感した。いずれ、序文の翻刻も含め、調査結果を総合した年表を公開しようと考えている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学

キーワード：文学一般、近代文学

1. 研究開始当初の背景

2005、6年度に授与された科学研究費補助金（基盤研究C）の研究成果「新聞小説の生成過程についての包括的な調査研究」で、報道と出版との関連性が判明した。そこで収集された資料や、独自の調査によってリスト化された年表があり、その年表に基づいて、研究が開始された。

2. 研究の目的

近代小説が生成される現場を再現することを目的として、新聞や雑誌などの活字媒体と書籍との密接な関係を一望できる年表作成を目指した。

3. 研究の方法

二次資料による年表作成ではなく、具体的な一次資料に当たって、調査する書誌学的方法を用いた。

4. 研究成果

以下では、明治初年の報道と出版との関係が明確化できた資料の一部を、最低限の書誌情報とともに、『小説神髓』（明治18年9月～19年5月）の出版された時期を下限として収録する。

明治7年の征韓論に際しては、朝鮮を紹介する染崎延房編集・石塚寧齋画図『朝鮮事情』第一輯上下（半紙本、3月出版、丁字屋忠七・丁字屋善五郎・大島屋伝右衛門）がある。ま

た、台湾出兵に当っては、田代幹夫『台湾軍記』全五編（草双紙、8月新刻、三府発兌）や、染崎延房『台湾外記 一名国性翁』（草双紙、12月25日官許、永保堂／東野新三郎）など、鄭成功物語が出版されていた。戦況報道には、伊藤久昭編輯『台湾戦争記』一～五巻（半紙本冊子、明治7年出版、吉田屋文三郎）がある。しかし、この分野への小説家の参入を促したという点で、佐賀の乱の実録である神奈垣魯文『佐賀電信録』上下（半紙本、9月、名山閣）が特筆に値するだろう。これは、翌々年の『西南鎮静録』（半紙本、明治9年12月2日版權免許、名山閣／牧野吉兵衛）とともに、土族反乱実録の代表的著作となる。

明治8年は、染崎延房著・孟斎芳虎画『報国倭魂』初、二編（絵本、4月、丸屋小林鉄次郎）などの幕末物語が出版された程度で、時事的ドキュメントとしての実録はなかった。しかし、明治9年の後半には、神風連の乱・萩の乱関係の土族反乱実録が、40種類も頻出する。紙数の関係で具体的書名は挙げられないが、書籍形態には、半紙本、活版本、草双紙、絵本などに涉っていた。出版界は、時事的な書籍に読み物市場の販路を見出し、それが翌年の西南戦争関連の実録出版を促したと考えられる。

明治10年の西南戦争は、書籍が報道媒体となったような活況を呈する。版型も前年と同様に多岐に涉り、本製本の書籍までが参入する。特に活版冊子型の書籍は、報道媒体としての新聞と競合して、戦況を逐次物語化していたといえる。翌年にかけて出版された西南戦争関係の実録は90種類を数える。その全てについて確認したが、代表的な書籍のみ掲げれば、新聞記事を抄録した樋口徳造編『鹿兒島記事』（半紙本冊子、明治10年2月13日出版御届、又新舎／樋口徳造）に始まり、伊藤静斎輯画『鹿兒島伝報記』初、二編（絵本、3月13日御届、大橋堂／児玉弥七）、沼尻＝（糸編に圭）一郎編『西南太平記』全一五号（中本、4月3日御届、編輯出版人沼尻＝（糸編に圭）一郎、万笈閣）、伊藤卓三編輯『遭難記実』（活版洋装本、9月7日版權免許、9月出版、日報社／條野伝平）、青木清輔編纂『西／南 征討史略』全三編九冊（半紙本、12月28日版權免許、同盟舎出版／青木清輔）などがあり、初期には未完で終わるものが多く、九月の戦闘終結後、全体を見透す実録が出版された。小説家としては、篠田仙果の活躍が目立ち、篠田仙果編・方円舎（小林）清親画『鹿兒島戦争記』全一二編（草双紙、3月3日御届、当世堂／杉浦朝次郎）など、十種類もの西南戦争物を出版していた。

このように、土族反乱の実録で活況を呈した出版界は、翌11年にはさらに時事に関わる書籍出版に新たな活路を開いた。その契機が、仮名垣魯文閔・久保田彦作著・楊州斎周

延画『鳥追阿松海上新話』全三編（草双紙、1月28日御届、錦栄堂／大倉孫兵衛）であった。12月10日から11年1月11日の「仮名読新聞」に連載された雑報記事である「鳥追阿松の伝」全一四回（確認済）が、増補訂正されて草双紙化されたのである。天理大学図書館、耽奇郎文庫所蔵に残された初編の稿本には、上巻を九丁にまとめるための書き直しがあり、草双紙化のための苦心が窺えるのである。この出版が成功し、新聞連載の続き物が草双紙体で出版され、いわゆる明治戯作となる小説出版が復活することになる。

「さきがけ新聞」の連載記事を草双紙化した芳川俊雄閔・岡本勘造綴・永島孟斎画『夜嵐阿衣花廻仇夢』全五編（草双紙、6月18日御届、金松堂／辻岡文助）の他、8月21日から9月12日まで「東京絵入新聞」に連載されて評判を呼んだ「金之助」全一六回は、逸早く竹内栄久編輯・梅堂国政画『帰咲梅の浪華津／絵入金之助ばなし』全三冊（草双紙、10月4日御届、亀遊堂／沢久次郎）として刊行され、さらに篠田仙果録・永島孟斎画『藻汐草近世奇談』全三編（草双紙、12月17日御届、青盛堂／堤吉兵衛）では、二編下以降に「金之助」を収録していた。そればかりでなく、二年後には、『花柳春話』を模した若松永胤『春／霞 黄金の双蝶』（ボール表紙本、明治13年5月12日御届、岡田平次郎、高田重助）という洋装本にもなった。

時事的出来事を実録化したものには、竹橋暴動を記録した山岸文蔵編輯『絵入／傍訓 近衛砲兵暴発録』（活版中本、8月26日御届、山岸文蔵）や、寺本弥太郎『絵入／仮名付 近衛砲兵暴動記』（活版中本、9月2日御届、寺本弥太郎）があった。時事的書籍が出版界の主要商品の一つになり、小説的な新聞連載記事（続き物）の出版と、時事的事件の実録によって出版界は甦った。

明治12年の一端については、「時事小説の可能性——一八七九年の切断面」で検討したが、事件を報じた新聞記事が、草双紙化される傾向はより強められるのである。前年の6月、佃監獄を脱檻した関口文七一味が、群馬県庁などを襲撃した事件は、松林伯円閔・永島孟斎画（四編以降梅堂国政画）『関口文七／写真阿若 新編伊香保土産』全七編（1月31日御届、松延堂／大西庄之助）となる。開化講談を標榜した伯円は、高座で新聞記事を講じ、松林伯円作・梅堂国政画『今常盤布施譚』全三編（草双紙、3月10日御届、松延堂／大西庄之助）も刊行していた。これも、前年12月17日から12年1月27日まで「郵便報知新聞」に連載された「布施いと物語」全一四回を草双紙化したものであった。新聞記事（活字）には版權がないため、他人が出版できるわけで、講談師や、書籍商主導による出版も可能だったのである。

1月31日に、斬罪となった高橋お伝については各紙が報じたが、中でも「仮名読新聞」は、2月1、2日に連載した「毒婦お伝の話」を中断して、すぐに草双紙化を図っている。それが、仮名垣魯文操觚・守川周重画『高橋阿伝夜刃譚』全八編（草双紙、初編本文活版、2月3日出板御届、金松堂／辻岡文助）であった。それに対して、「東京さきがけ新聞」は、2月1日から5月6日まで「阿伝の咄」全六九回を連載しながら、芳川俊雄閔・岡本勘造綴・桜齋房種画『其名も高橋／毒婦の小伝 東京奇聞』全七編（草双紙、2月3日御届、島鮮堂／網島亀吉）として草双紙化していたのである。

2月25日の各紙が報じた、華族久留島家の惨殺事件は、柳水亭種清作・桜齋房種画『五人殲苦魔物語』（草双紙、3月1日御届、延寿堂／丸屋鉄次郎、三編末尾署名は香朝楼芳春画）として出版され、「有喜世新聞」の2月22日から4月19日まで連載された続き物「水錦隅田曙」全二七回は、伊東専三著・前島和橋補綴・梅堂国政画『水錦隅田曙』全三編（草双紙、5月8日御届、金松堂／辻岡文助）となった。前年5月の大久保利通襲撃犯の犯人、島田一郎については、芳川俊雄閔・岡本勘造綴・桜齋房種画『嶋田一郎梅雨日記』全五編（草双紙、6月3日御届、島鮮堂／網島亀吉）があり、7月の米前大統領グラントの来日に際しては、仮名垣魯文和解・鮮齋永濯画『格蘭氏伝倭文章』全三編（草双紙、7月23日御届、金松堂／辻岡屋文助）など、小説家の手で時事的な出版物が作られていった。

秋には、藤田伝三郎の贗札事件が各紙によって報じられたが、それと関連した書籍に、平野伝吉編輯『絵入 藤田伝三郎実伝記』全五編（活版、10月1日出板御届、平野伝吉）があり、柳水亭種清綴・陽州斎吉延画『豊時田秋＝（さんずいに速、なには）新雁』初編（草双紙、10月1日御届、錦松堂、編輯兼出版人／伊沢菊太郎）、羽田富次郎編集・生田幾次郎画『不事多侠客伝』全五編（絵本、届出年月日なし、大橋堂／児玉弥七）などの時事小説が出版された。

明治13年では、「いろは新聞」の1月7日から4月4日まで連載された、裁判中の広沢参議暗殺犯の履歴である「名広沢辺萍 一名板垣太郎小伝」全三一回が、翌月には仮名垣魯文披閱・京文舎（花笠）文京（渡辺義方）著・梅堂国政画『名広沢辺萍』全三編（草双紙、2月14日出板御届、金松堂／辻岡文助）となり、この他に仮名垣魯文閔・京文舎文京綴・守川周重画『冬兒立闇鴟（ふくろう）』全三編（草双紙、3月3日御届、青盛堂／加賀吉堤吉兵衛）などの連載状況も判明した。

柳水亭種清綴、小林とし参画『猛田姉妹新白石』初編（草双紙、2月23日御届、3月出版、柳心堂／山中喜太郎）は、1月18日から

27日まで「東京絵入新聞」に連載された「竹田姉妹の話説」全八回の草双紙で、実父を傷害した男が母と姦淫したため、姉は身を売り、妹が男に復讐するという物語は、多くの異版を生み、和田篤太郎編輯・尾形月耕画『実録文庫 白石譚』上下巻（活版和装本、内題は「白石嘶孝女の仇討」、明治17年1月9日御届、春陽堂／和田篤太郎）他、明治20年以後にも三種類が管見に入った。転々堂主人閔・桃川燕林著・梅堂国政画『賞集花の庭木戸』全六編（草双紙、5月3日御届、山内万吉編輯、松延堂／大西庄之助）は、明治10年5月26日に没した木戸孝允の伝記物語で、芳川春涛閔・岡本起泉綴・楊洲周延画『沢村田之助曙草紙』全五編（草双紙、7月3日御届、島鮮堂／網島亀吉）も、明治11年7月7日に没した沢村田之助の伝記物語であった。

「真土村長右衛門謀殺の一件」全六回（明治11年11月5～10日「かなよみ」）などの他、各紙が報じた真土村の騒動は、逸早く伊東市太郎編輯、富田砂莖閔、中島亨齋画『相州／奇談 真土の月疊松影』全五編（本文活版小本、6月14日御届、横浜 伊東市太郎）や、雑炊亭狸雄述（平野伝吉）『真土村義農精心』（活版冊子、8月6日御届、錦松堂／平野伝吉）という活版本となり、翌年には、武田交来録・大蘇芳年画『冠松真土夜暴動』前後編（草双紙、4月6日御届、錦寿堂／船津忠治郎）として草双紙化されていた。その他の時事的出来事の実録では、警官と兵隊との衝突を報じた金子源二郎『洋刀／官棒 鳴渡呉服橋騒動』（活版冊子、9月3日御届、金子源二郎、発兌錦松堂／平野伝吉）や、石川作治郎『東京／府下 暴風景況録』（活版冊子、10月8日御届、石川作治郎、発兌錦松堂）があった。

8月3日から9月22日に、「東京絵入新聞」が連載した魁蕾子稿「籬の菊」全四一回は、中島元久『籬の菊操鏡』（活版冊子、9月27日御届、横浜 静楽堂／池田藤吉）と、渡辺文京綴・孟齋芳虎画『籬の菊操鏡』全三編（草双紙、11月12日御届、青盛堂・加賀屋／堤吉兵衛）の二冊になっていた。地方で活版冊子となり、東京の絵草紙屋が後を追う形がそこには見られるだろう。また、10月2、3日の「東京絵入新聞」が「品川楼情死の話説」と報じ、10月3、5五日の「かなよみ」が「豊栄盛糸情死話し」と報じた心中事件は、拈華道人綴『谷豊栄／娼妓盛糸 品川楼秋のあけほの』正統（活版冊子、再版10月11日御届、仲田豊太郎）となり、春亭史彦綴・梅堂国政画『北廓花盛紫（さとのなさはなさかるむらさき）』全三編（草双紙、明治14年4月20日御届、松延堂／大西伊勢屋庄之助）となった。

これも、11月27日から12月1日まで「東京絵入新聞」が「第二仇討ばなし」と報じ、11月25日から12月4日の「郵便報知新聞」

が「川上行義復讐の顛末」全九回と報じた仇討事件は、柳水亭種清・年参画『報讐玉川三良子』初編（草双紙、12月20日出版御届、横浜 柳心堂）となり、芳川春涛関・岡本起泉綴・楊洲周延画『川上行儀復讐新話』初二編（草双紙、明治14年1月6日御届、島鮮堂／綱島亀吉）となっていた。また最後の仇討として知られ、各紙が目した臼井六郎復讐譚は、土屋幸一郎編輯『絵入／つもる／うらみ 明治の仇討ち』（活版冊子、12月24日御届、26日出版、名古屋 高木惣太郎）となり、さらに仮名垣魯文関・雑賀柳香著・梅堂国政画『冬楓月夕栄』全三編（草双紙、12月27日出版御届、金松堂／辻岡文助）として出版された。この他に、明治13年で特記される書籍としては、戸田欽堂著『民権演義情海波瀾』（ボール表紙本、6月15日御届、聚星館／吉岡保道）や、風韻子著『龍宮／奇談 黒貝夢物語』（活版冊子、10月21日御届、風韻舎）などの、政治的な寓意小説が出版されたことである。

明治14年は、未調査の部分も残すが、全体的には、前後の年に比して低調であった。武田交来録・楊洲周延画『倭洋妾横浜美談』全三冊（草双紙、4月6日御届、錦寿堂／船津忠治郎）は、明治13年6月26日から7月4日の「東京絵入新聞」に連載された、魁薺子稿と考えられる「洋妾の嘶し」全八回を草双紙に仕立て直してあり、3月22、23日の「朝野新聞」が宮下平三郎報「群馬県下西群馬郡騷擾始末」として連載した農民一揆は、彩霞園柳香著・梅堂国政画『蓆簾群馬嘶』全三編（草双紙、4月25日御届、金松堂／辻岡文助）となっていた。また秋には、10月8日の「東京曙新聞」雑報が「世界顛覆何々とかいふを印刷に付したる芝宮本町一番地の平野伝吉は昨日其筋へ呼び出され」と報じた、風俗壊乱の虞がある時事的な書籍があった。それは、中組源太郎編輯『世界転覆奇談』（中本、10月5日出版御届、中組源太郎）と、小林栄成編輯『世界転覆奇談』（中本、10月6日出版御届、小林栄成）で、ともに絵本仕立て、世界滅亡までの半月が描かれていたが、平野伝吉のものは確認できなかった。

明治15年は、政治的な事件や政党系新聞の創刊など、それまで以上に時事的な出版が活発になった年で数多く収集できたが、紙数の関係で特徴的な文献のみ記す。まず、漢文戯作雑誌「東京新誌」に連載の続き物が、活版の洋装小本として出版されていた。明治12年11月29日から13年4月17日に連載した竹翠稿「南海千鳥の音信」全二〇回は、森仙吉編輯『南海千鳥の音信』前編（活版洋装小本、7月10日出版御届、鶴声社／森仙吉）として翻刻出版され、岡野三郎編輯『八重桜里廻夕暮』や、和田篤太郎編輯『八重／手すき恋路廻蕪蘿』など、著者ではなく版元主導の

編集で刊行されるのである。それらが活版の小本である点も注目され、春陽堂の出発期の様態として記憶に残る。

異色な書籍としては、城慶度著・前島和橋関『絵／入 西洋天一坊』（ボール表紙本、2月27日出版御届、青木活版所／青木忠雄）がある。これは、英国の新聞が掲載した裁判事件を翻案したもので、後に三村芳南序文・早川居子編集『擬紫西洋天一坊』（ボール表紙本、明治18年7月7日出版御届、早川居子、吉野喜之助／真盛堂）として出版され、全く同文の著書が、他の著者名で出版されるなど、ここでも著者の権利より版元の意向が優先する事態が見出せるだろう。

政治的な事件としては、4月6日の板垣退助襲撃事件と、7月23日の壬午事変がある。それぞれ、さまざまな書形で多くの書籍が出版された。前者に関する書籍は、東洋太朗（彩霞園柳香）校閲・中島市平編輯・梅堂国政画『民権／泰斗 板垣君近世紀聞』全三編（草双紙、6月14日御届、金松堂／辻岡文助）など10種類が確認でき、後者には、『絵本朝鮮異聞』全三篇（草双紙、8月14日御届、延寿堂／丸屋小林鉄次郎）他、20種類を数えた。

前年10月に結党した自由党は、6月25日に「自由新聞」を創刊し、9月1日には「絵入自由新聞」を創刊する。「自由新聞」創刊号から11月16日まで連載された「西の洋血潮の暴風」全六九回は、デューマ原著・渡辺文京校閲・百華園主人意識・一松斎芳宗画『仏国革／命起源 西洋血潮小暴風』第一編（ボール表紙本、12月出版、絵入自由新聞社／柳谷藤吉）となり、8月12日から16年2月8日まで連載された、宮崎夢柳訳「仏蘭西革命自由の凱歌」全九七回は、その四〇回までは、デューマ原著・宮崎夢柳意識・一松斎芳宗画『仏蘭西／革命記 自由乃凱歌』一、二編（ボール表紙本、12月13日御届、絵入自由新聞社／柳谷藤吉）となった。「絵入自由新聞」創刊号から10月28日まで連載された宮崎夢柳「冤枉の鞭答」全一四回は、内藤久人編輯『魯西国／虚無党 冤枉の鞭答』（ボール表紙本、12月4日御届、同月出版、駿々堂／内藤久人）として出版され、ヴェルニエ著・川島忠之助訳『虚無党退治奇談』（洋装本、9月、川島忠之助）など、他に二種類の虚無党関係の書籍が、この時期の出版界を賑わした。

明治16年も引き続いて、時事的な出版は活況を呈した。続き物が活版和装本の版型で出版されるようになり、活字本が出版界を席卷する。4月26日から8月5日まで「東京絵入新聞」に連載された「浅尾よし江の履歴」全八七回は評判を呼び、すぐに松亭鶴仙『浅尾／岩切 真実競』前後編（活版和装本、4月14日出版御届、鶴声社／森仙吉）として出版された。これも、著作権のない新聞記事を版元主導で刊行された例であり、松亭鶴仙は

版元の仮名であった。しかし、新聞の続き物の書籍化に異を唱える、やはり男女の恋を主題とした書籍もあった。それは、頓陳漢斑馬述・香夢亭主人編・尾形月耕画『月雪花恋路の踏分』全三編(活版和装本、4月21日御届、春陽堂／和田篤太郎)である。中編序文では、実事に縛られない「作り物譚」の必要性を説き、時事小説に対する反措定として、記憶されるべき文献といえる。

4月25日から6月27日の「いろは新聞」に連載された、稲野年恒画「任侠一話(会津小鉄の履歴)」全四〇回は、尾形月耕画『地質(ちがね)は会津／鍛錬(きたへ)は三条 長脇差小鉄廻り刀』前後編(活版和装本、5月29日出版御届、編輯兼出版人 春陽堂／和田篤太郎)と、孤蝶園若菜編・稲野年恒、芳年画『性質は会津／鍛錬は三条 長脇差小鉄廻り刀(きれあち)』前後編(活版和装本、5月30日御届、宝永堂／井上茂兵衛)との二種の単行本となっている。後者が著者を明らかにしている点で、著者の承諾を得た著書と考えられる。それに対して、明治15年12月19日から16年2月21日まで「絵入自由新聞」に連載された「合鏡心研醜」全四八回は、和田篤次郎編輯『合鏡心妍醜』(活版和装本、6月25日出版御届、春陽堂／和田篤次郎)と、後にボール表紙小本(明治18年3月12日再版御届、編輯兼出版人 春陽堂／和田篤次郎)というように、同一書店から二種の版型で出版されていた。また、1月24日から9月27日まで「土陽新聞」に連載された「汗血千里の駒」全六八回も、坂崎鳴々道人(紫瀾)・雑賀柳香補・仙齋年信画『汗血千里駒』全三編(活版和装本、7月出版御届、大坂撰陽堂／芝定四郎)と、坂崎鳴々道人『汗血千里駒』(ボール表紙本、7月2日出版御届、編輯人 雑賀豊太郎、翻刻出版人 和田篤太郎／春陽堂)の二種の単行本になっていた。

7月6日から25日まで「絵入自由新聞」が連載した「明治天一坊松平慶承裁判」全一五回など、各紙が目にした裁判は、『以勢(にせ)／阿婦飛(あふひ) 明治天一坊』上下編(活版和装本、7月6日御届、編輯兼出版人 小林篤太郎)や、花笠文京(渡辺義方)編・梅堂国政画(後編補画芳盛齋国晴)『愛知／奇聞 明治天一坊』前後編(草双紙、7月24日御届、松延堂／大西庄之助)などとなった。清仏戦争については、雑賀柳香編輯・歌川国松画『安南戦争実記』第一号(活版和装本、7月2日出版御届、芝定四郎)などが確認できるが、前年の壬午事変には及ばなかった。7月20日に亡くなった岩倉具視については、土屋郁之介訂正・芝定四郎編輯・一応齋国松画『従一位大勲位／岩倉具視公誠忠義伝』(活版和装本、明治16年7月19日出版御届、撰陽堂／芝定四郎)や、雑賀豊太郎編輯・歌川国松画『勲績／美譚 岩倉具

視公之実伝』(活版和装本、7月20日御届、金松堂／辻岡文助)などとして出版された。

絵入自由出版社が、「絵入自由新聞」連載の続き物を、活版和装本で出版するようになる。5月23日から8月16日まで連載の「高峯の荒鷲」全五七回は、宮崎夢柳著・大蘇芳年画『勤王／済民 高峰之荒鷲』前後編(活版和装本、7月17日出版御届、宏 虎童、発兌元 絵入自由出版社)の他、花笠文京『浜の松／風拾遺 湖水の口碑』や、花笠文京『赤繩／奇累 五月雨日記』があった。

「芳譚雑誌」に連載した「対酌一寸木屋街」を改題して、柳亭種彦著・吟光画『昼夜帯加茂川染』(活版和装本、7月21日御届、松江堂／富田豊次郎)として出版した藍泉は、「戯作者の泣言」(9月8日「芳譚雑誌」)で、著者の意向に反した本作りについて、不満を述べている。著者と出版社との間にわだかまる不満を表明していて、そこに、著作の権利意識を見出すことができる。

菊亭香水閣・花柳粹史編『真実／比較 野路の若鹿』(清朝体活版和装本、8月28日御届、三春堂／尾本九太郎)は、8月29日から10月20日まで「東京絵入新聞」に連載された「後の若鹿の小伝」全三六回に基づいていた。東洋太朗訂正・箕輪勝編輯・稲野年恒画『福島／奇聞 自由の夜譚』初編(活版和装本、9月3日御届、金松堂／辻岡文助)は、9月1日に東京高等法院で判決の出た、福島事件の「河野広中氏以下が国事犯の顛末」を綴った草紙だが、新聞では報じられながら、自由党過激事件についての時事小説は、管見に入った限りではこの他には見出せなかった。

明治17年も、引き続き時事小説の供給は続くのだが、評判作の再刊や翻刻も多くなり、新作は低調になってくる。草双紙体の書籍は姿を消し、活版和装本が市場を独占する。

新聞連載の続き物でも、時事的出来事の実録でもないが、講談の編輯本に異色な出版形式の書籍が出現した。それが、伊東専三編輯・歌川国峰画『新説暁天星五郎』全二三編(清朝体活版和装本分冊、2月21日御届、東京金玉堂出版／吉井幸造)であった。この分冊形式は、翌年の伊東専三『名立浪龍神於珠』全一八編でも踏襲されるが、三遊亭円朝演述・若林珪蔵筆記『牡丹燈籠』(活版和装本分冊、7月14日御届、東京稗史出版社)の分冊形式の先駆けとして注目される。ところが、これには、桜川如燕口演・伊東専三編輯『新説暁天星五郎』前後編(活版和装本、5月28日翻刻御届、原版人吉井幸造、翻刻出版人井澤菊太郎、松栢堂)という異版があった。伊東専三は、それが偽版であることを六月十九日の「自由燈」広告欄などで、松栢堂版の売捌き筆頭にあった山中喜太郎が、著者に無断で翻刻したと抗議して、桜川如燕口演・伊東専三編輯・歌川国峰画『新説暁天星五郎』(清

朝体ボール表紙本、6月13日別製本御届、東京金玉堂出版／吉井幸造)という一冊本を出版していた。前年の柳亭種彦に続いて、著者の権利意識が主張された点で忘れ難い。

明治12年2月17日から5月9日の「東京絵入新聞」に連載された、子謙粹史報「野路の花」全四六回を単行本化したものに、高村蕩一郎編輯『人情／美談 野路の花』前後編(活版和装本、6月18日出版御届、清光堂／本阿弥己之吉)がある。これも男女の恋物語として人気があり、『人情美談 野路の花』(ボール表紙本、明治21年10月8日印刷、10月10日出版、日吉堂／菅谷與吉)などの異版を作り出した。他の人情物では、3月25日から4月13日の「東京絵入新聞」に連載された「松竹梅三人娘」全一七回に基づいた、高村蕩一郎『松竹梅三人娘』(活版和装本、明治17年月日御届、出版人 本阿弥己之助、発兌元 金幸堂稲垣良助・金栄堂牧野惣次郎)もあった。

「自由燈」の創刊号(5月1日)から6月24日まで連載された幻々道人稿「今浄海六波羅譚」全二七回は、すぐに福島幾太郎編輯・雷齋基春画『今浄海六波羅譚』(活版和装本、6月28日御届、稗史館／福島幾太郎)として出版され、同じ創刊号から7月23日まで連載された案外堂「自由艶舌女文章」全四七回は、斉藤家寿家編・案外堂主人稿・大蘇芳年画『自由艶舌女文章』前後編(活版和装本、7月24日出版御届、編輯兼出版人 斉藤家寿家／自由燈出版局)となっていた。

明治18年も、基本的に時事小説の供給は続き、評判作の再刊や翻刻も多かったが、報道と小説との分化が提案されるなど、変化を予感させる年となった。「自由燈」の明治17年12月10日から、18年4月3日まで連載された「鬼啾啾」全七三回は、宮崎夢柳著・月岡芳年画『虚無党／実伝記 鬼啾啾』(活版洋装本、奥付欠、明治18年10月、旭活版所)として出版されるが、翌19年3月17日の「東京日日新聞」の雑報によれば、12月28日と、1月14日に出版発売が禁止されるのであった。

そして、「郵便報知新聞」が「遊戯ニ属スル閑文字モ亦其必要ヲ報スルニ会ヘリ」とした「叢話」欄に、1月1日から4月5日まで連載した「繫思談」全五五回は、リットン「ノーヴェル」の翻訳であり、明らかに他の雑報記事とは弁別されていた。「繫思談は別に書冊となして発行することに決し」と連載を中断して、李頓著・藤田茂吉、尾崎庸夫訳纂評『諷世嘲俗 繫思談』(洋装本、12月出版、報知社)(明治18年)として出版された。これは、虚構的な新聞の連載記事である続き物とは異なり、純然たる小説(虚構)であった。新聞が、時事的な実録や続き物ではない小説を掲載し、それが書籍になったのである。

そこには、報道と出版との間の分割線も見え隠れしているだろう。そうした分割線に従えば、報道と出版との蜜月は終わり、時事的出版物は、際物出版として見下されることになるだろう。私たちがいる現在は、そうした場所にほかならなかった。

しかし、まだ結論には早いだろう。12月27日の「読売新聞」は、「読売雑譚」欄に、聯画閑人署名の「新聞紙の小説」を掲載し、翌19年1月4日から二面下段に小説欄を設け、ジョルジュ・オネー、聯画閑人訳の「鍛鉄場の主人」を連載するのである。ここに、事実譚としての続き物と、虚構の小説との分化が紙面に刻印されたといえる。まさに、報道と小説との分化、報道と出版との分化が成立したのである。

しかし、明治19年も依然として新聞続き物の出版は続き、明治20年以後も、報道と分化した出版界は、時事的出版物を出版していた。石川巖が「時事小説年表」(『明治文化全集』)に記載された書籍について、全て書誌的調査を実施し、報道と出版との間に、確実に専門化は進んでいたといえる。しかし、紙数が尽きたので、ここまでの報告とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 山田俊治「明治初年の「言」と「文」一言文一致論前史」『文学』第8巻6号、84頁～90頁、2007年、査読無
- ② 山田俊治「時事小説の可能性——一八七九年の切断面」『日本近代文学館年誌 資料探索』4号、22頁～39頁、2008年、査読無

[学会発表](計1件)

- ① 山田俊治「美術小説ジャンルの生成」日本近代文学会秋季大会シンポジウム、2007年10月27日、立命館大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 俊治 (YAMADA SHUNJI)

横浜市立大学・国際総合科学研究科・教授
研究者番号：10244485